

西会津町の歴史 — 新郷編 —

1. 今に残る高目集落の信仰

(1) 高目村の寺社

江戸時代の高目村は、現在の荒木・高目・小清水自治区のことである。他の地区であまり見られない、高目村における信仰を紹介する。高目は海拔 400m 前後の村で「大清水」と呼ばれている湧水がある。その水量は多く、どうどうと音をだして流れ落ち、高目・小清水・平明・呼賀の水田を潤している。その清水の脇に大清水神社がある。この水の恵みに感謝しての神社で



富士神社の胎内くぐり

あろう。安永 9 年(1780)、水林(今の水源涵養林)として大峯を指定し、相守るよう藩が指示している。高目には麓山神社の祠がある。町では唯一のものと思う。高目は現在 23 戸で暮らしているが、明和 8 年(1771)には 40 戸の暮らしが成りたっていたのである。田畑だけでなく山の恵みがあつたからである。

海拔 509m の富士山の山頂には、山の名前の由来となる富士神社の祠がある。この祠は胎内くぐりができ、3 回くぐると生まれ変わることができるという。人の一生のうちには、不安や悩み・人に言えないことや良心の呵責などがついて回るものである。そんな時に参拝し、胎内くぐりをすることで新しい日々が始まる。庶民の願いを叶えてくれる信仰の山である。

高目には示現寺がある。寺伝によれば、仁安 2 年(1167)の建立とある。寺は字寺前にあるが、慶安 4 年(1651)に字畑福より移転したという。畑福の道脇に「じおう堂(十王堂)」と呼ぶ場所がある。十王様信仰は平安時代後期から鎌倉時代にかけて盛んに信仰されたという。そのほか滝坂の地蔵堂にも十王像が祀られている。橋屋の龍蔵寺にも十王像が祀られている。高目には十王像がないが、「天明八年(1788) 法師智心 十王堂守智心」と過去帳にある。

愛宕様というと愛宕神社と思うが、小清水と八重窪には愛宕堂がある。小清水には、室町時代の永和 2 年(1376)に愛宕仏像地蔵尊が建立されている。

(2)隠れキリシタン

会津にキリスト教が広まったのは蒲生氏郷の入部からと言われ、秀行時代が最も盛んと言われ、宇都宮への領地替えの時に領内各地に広まったという。幕府の禁教政策により信仰の対象となるのを剥奪されると、それに替わる変形したものを求めたという。十字の四ツ目や変形文字などである。



隠れキリシタンの四ツ目十字の祠

高目村にもキリシタンの存在がうかがえる。高目諏訪神社右側に、おんば様の祠がある。祠の正面は十字文様の四ツ目になっている。町重文の石仏の背面には、変形十字が彫られている。小清水の墓地には3体の変形十字の墓がある。荒木には木地師の墓の後にある2体の墓に、変形十字が彫られている。高目の墓にも、変形十字が刻まれている。これらは、元禄年間のものが多い。荒木生まれの古老から、マリア像を実家の縁の下に隠したと言われたことがある。

そのほか、新郷地区で珍しいものがある。橋屋の金毘羅神社に、煙草神社が合祀されている。昭和17年に小野町の煙火神社から分社してもらったという。

戸中には御前神社と青麻神社がある。両社とも織物・機織に深いつながりがある。井谷には太子堂がある。幕府の宗教政策で改宗させられたが、個人所有のため今に残っていると思われる。

漆窪には、大正8年建立のト相教の上田貞養神霊の墓がある。越後国住人とある。



2. 阿賀川の滝殺生と悲願の橋

(1) 滝殺生

文政12年(1829)、8代藩主容敬公巡見時の道筋手鑑に、杉山村滝殺生・木曾村川殺生とある。魚を捕るのに滝と川の違いはどこにあるのだろうか。太古より川を遡上する魚は大切な食料であった。滝坂では寛永中(1624～1644)に労力をもって河岸を割砕き漁場を作り、捕えた魚を藩主に献上したとある。その漁場を滝穴・穴滝といっている。自然に掘られた穴に魚がよどむのを見て、穴を掘れば漁場になると考え工事をしたのであろう。



寛永18年(1641)、数年荒らした滝を普請して、以後荒らさぬようにし、せりによって滝の権利を決めるように、加藤公の家臣堀尾兵右衛門の名で滝坂に申し渡されている。

貞享2年(1685)には銚子ノ口前後にある5つの滝を、月の15日は滝坂、5日は徳沢、10日は大下野尻(今の端村)で魚を捕り、商売をして役銀をおさめていた。

柴崎の瀬頭・岩穴滝場は寛政元年(1789)村の源右衛門が試みに穴をうがった所、魚がよりついてきたので、10名ほどで岩穴を掘るも思うように進まず石切や土方を雇い5年をかけて工事を行った。瀬頭はおよそ縦70間、横15間。穴滝1ヶ所で11面あり、橋立6面、柴崎5面となっている。滝坂が明治12年に提出した川漁場は7ヶ所あり、それぞれに滝の名がついている。

(2) 阿賀川に橋を

柴崎・橋立では、対岸の上野尻・下野尻へ舟が人や物の輸送を担っていた。増水や強風などで休まざるを得ない日も多かったであろうし、橋があれば便利と思う人もいたことであろう。それを具体化する動きとして、文政6年(1823)、三方村(喜多方市高郷町)肝煎唐橋新十郎より、銚子ノ口への架橋計画が出される。橋が架ければ運賃収入の道が途絶えてしまうので、柴崎や両野尻より補償の要望書が出されたためにすぐには受け入れられなかった。文政11年(1828)と天保5年(1834)にも

要望書が出されているので、架橋の動きがあったと考えられる。

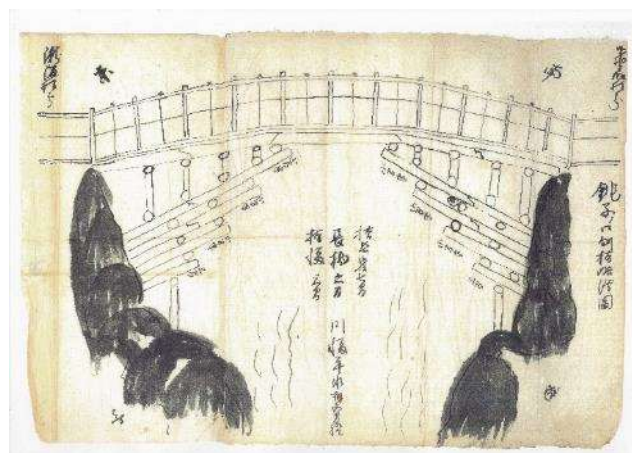
架橋とは別に文政 6 年(1823)に安積新平の申し出て瀬頭に舟橋が完成するが、文政 8 年には同じ場所に舟橋の計画が出されているので利用期間は短かったようである。その後も何回か舟橋の計画があり、嘉永 3 年(1850)には完成直前の舟橋が 10 月の洪水で流失している。これを見てからか、同年三方村肝煎より再び銚子ノロへの架橋願が出されている。明治 6 年 1 月に柴崎で舟橋を着工し、翌年 7 月 28 日に渡り初めを行うが、9 月 13 日大洪水のため流失してしまう。同年 12 月、柴崎から舟橋新規願が出され、舟橋にかける住民の熱い思いが伝わってくる。

明治 18 年 8 月滝坂の五十嵐健次・佐藤嘉藤治・笹川村外 4 ヶ村・群岡村外 3 ヶ村・その他 3 名の人によって銚子ノロへの架橋願書が出され、それが認められて工事に取りかかった。それは巾 3 間・長さ 28 間の木造アーチのモダンな橋であったが、完成直前に請負人の失策(重量計算の間違いという)で落橋し、関係者の望みは一瞬にしてついでてしまった。

岩越鉄道の完成もあり、大正 5 年、柴崎と上野尻との間にワイヤーを張り、岡田式の渡航工事が竣工し、利便性が増した。しかし、大正 11 年 11 月 14 日に渡船が激流で転覆し、船頭武藤善伍は一児を助け、もう一児を助けようとするも殉職してしまう事故も発生した。

この事故もあり「阿賀川に橋を」と新郷村を中心に県に働きかけ、昭和 13 年 7 月 31 日県知事君島清吉をむかえ柴崎橋完成の渡橋式を行っている。

「阿賀川に橋を」の願いは 115 年後に実現したのである。この橋は昭和 34 年上野尻発電所竣工まで利用されていた。



銚子ノロの架橋計画略図

3. 会津と越後を結ぶ裏街道

越後裏街道といわれる道路が新郷を貫いている。柴崎－石坂峠－樟山－平明－漆窪から陳ヶ峯峠となり、喜多方市高郷町小土山にぬけている。この街道、会津と越後を結ぶ最も古くて重要な道路であった。

永延2年(988)、城四郎重範が会津に八館を築いたという説がある。会津坂下町宇内の陣ヶ峯城が造られたという。城一族が越後からどの道を通って、会津に進出したのであろうか。

高寺の衆徒ここにて敵を防ぎし所とあり、高寺と城一族が戦ったので陳ヶ峯と名づけたという。大谷にかけて数万騎沢・旗子沢等の名があり、宇内にも同様の地名がある。何等かのつながりがあるのではないかと思う。峠の頂上南側に城館跡が見つかっている。恵日寺の衆徒頭の乗丹坊が信州の横田河原に向かった時、ここを通ったともいう。

滑沢には城越山じょうのこしがある。

「城越山 相伝ふ 昔中野三十坊とて此の山麓に巨刹あり 佐原義連を相拒みて楯籠りし所」なりと『新編会津風土記』にある。源頼朝は文治5年(1189)、会津四郡を佐原義連に賜うとあり、佐原氏の勢力と城氏との間での戦いであったようである。これらのことから、城一族の会津進出は新郷の道を通って行ったことがうかがえる。

また伊達政宗が会津を支配した時、館野山に越後の上杉景勝にそなえるため二重の空堀の館を築こうとしたり、富士山の立岩側に狼煙ろうえんの見張り小屋があつて、富士山頂で狼煙を上げたといわれている。



戊辰戦争では8月29日のあかつき、柴崎に松代藩・新発田藩・広島藩の藩兵が上陸した。柴崎には広島藩の一小隊、滝坂には新発田藩の小隊、井谷へは新発田藩の小隊を向かわせた。夕方、長州の奇兵隊はじめ諸藩の兵が柴崎に集結し、1つは奥川へ、1つは陳ヶ峯峠へ、1つは井谷へと向かうこと事となる。夕七つ頃(午後4時)、東軍60名ほどが滑沢に進出してきたため、西軍は石坂峠と一番クラ山より発砲する。東軍は利あらずと平明に退き、西軍は滑沢に宿営する。翌30日、東軍は午後に樟山へ引き返し、正源寺の杉林を盾に砲戦をしかけるが、二方の山から攻められ平明に退く。9月1日には、平明高橋の墓地と笠松山で撃ち合いがあったという。井谷に進出した西軍は2日、三手に分かれ中山・赤岩を目ざして攻撃を開始し、激しい撃ち合いになり、西軍に討ち死にや手負いが出るも、長芸2藩の背後からの攻めに抜刀の戦いとなり、東軍は退き西軍は中山で一夜を明かす。2日未明、西軍は陳ヶ峯峠の東軍を本道より奇兵隊、左山上より芸州が攻撃する。東軍は朱雀二番隊や斎藤一率いる新選組等が応戦するも敗れ、舘原・木曾へ退却する。

こうしてみると、新郷の街道は軍事的には最も重要な道路であることが分かる。

江戸時代に入ると戦いはなくなって次第に物資の輸送にとって重要な街道となり、越後裏街道として整備されてきた。特に北方(喜多方市)や米沢藩の産物は主にこの街道を通り、柴崎で舟越えをし、徳沢・津川へと運ばれる。これらの輸送を担ったのが山三郷等に特に認められた中追馬であり、文政11年(1828)、塩中追いは山三郷随一の産業と記されている。

この街道を会津藩主が2回通行している。

1回目は3代藩主正容が新発田領境見分のため、その巡視の帰りに8月3日下野尻で昼休み後、阿賀川を舟越えし、柴崎へ、そして陳ヶ峯峠を通過して木曾村泊まりとなっている。一行は436人という。

2回目は文政12年(1829)6月、8代藩主容敬一行380人が新発田領地巡見に赴き、赤谷より引き返し津川泊まり。翌日、鹿瀬から日出谷・馬取から檜木峠を越え、奥川に入って吉田泊まり、そして木伏峠・陳ヶ峯峠を通り、木曾でお昼、そして帰城となっている。

この通行時には通過する村等の説明のため「御巡見道筋手鑑」があり、それぞれの村の石高・家数・人数・馬数・産業(田畑以外の仕事がかかれており、村々の特徴があらわれている)が書かれ、老人(70歳以上)の名前と子育ての者(3人以上)の名前が書かれている。



陳ヶ峯峠陣跡（復元図）

天保14年(1843)6月、幕府は金山見分のため役人3人を調査にあたらせ、同道者を含めて73人が20日に木曾村から小土山村の鉛山を見分し、陳ヶ峯峠を通り吉田新田村に泊まっている。

この時に陳ヶ峯峠と木伏峠に小休所小屋と手水置場所が設置されている。

文久3年(1863)4月、高目村では27人で無尽を始める。参加者に陳ヶ峯として藤三郎・武七・三蔵の名がある。茶屋の家主であり、この峠には3軒の茶屋があった事が分かる。

立岩側の茶屋は大正の始めまであったようで、明治21年に磐梯山が大爆発した時、新郷村役場吏員は峠の茶屋に行き爆発を確認したという。

明治7年12月21日、平明に山都・群岡間の立ち寄り局として五等郵便局が設けられる。配達区域は新郷と奥川の全域と高郷町の揚津。局長は置かず、薄茂七が取扱人となった。

4. 化ケ物沢と化け猫伝説

(1) 化ケ物沢

旧新郷小学校と笹川郵便局との間にある沢を化ケ物沢といい、この沢の由来には2つの説がある。

1つは生き埋説である。樟山村の肝煎が役人の非道にあい、財産を召し上げられてしまった。復讐しようとしたが果たせなかった。63歳にもなり自ら死んで神仏の力にすがって果たそうと、小学校裏の墓地に生き埋になったという。以来、時々怪霊が現われたので化ケ物沢と名づけられたという。この話の元は、元禄10年(1697)、樟山村肝煎喜三郎が未進金を出したため、肝煎職と田宅が召し上げられたため遂電してしまう。代わって柴崎村肝煎忠左衛門弟小右衛門が未進金を弁納し、肝煎となる。喜三郎は、5年後に赦免され帰村しているので生き埋めにはなっていないと思われる。樟山はその多くの田畑が笹川沿いにあり、毎年のように繰り返される水害に苦しめられていた。平明の作坂から樟山までの川通りが、一面の川原になった年もある。その復旧や年貢の減免などをめぐり、藩との間にいさかいがあったのは確かである。

もう1つはオサイ亡霊説である。樟山から平明に奉公にきたオサイが不義の子を身ごもり、誰にも相談できず、悩んだ末に川へ身を投げ自ら命を絶った。哀れに思った村人が村界の墓地に埋葬した。ところが、夜な夜な子供を抱いたオサイが現れ、道行く人に「この子供を抱いてください。どうか抱いてやってください。」というので、村人や旅人が恐れるようになり、道行く人が途絶えてしまった。この話を聞いた小島の和尚さんがオサイの霊を寺に連れ帰り、読経を唱え成仏させたのでオサイが現れなくなったという。



現在の化ケ物沢

(2)高目の猫騒動

むかし、むかし、高目の新屋敷に家が4、5軒あった頃の話だとき。ある日、旅の芸人がお寺で、唄や踊りを見せに来ただとき。村の人もみんなそれを見に行っただとき。ところが、新屋敷のある家では、来たばかりの嫁に「おめえは家の中でもきれいに掃除でもしてろ。」といって、見に行きたい嫁だけをつれていかなかつただと。

嫁は「何ぼ来たばかりの嫁でも、オレどこだつてつれて行けばいいのに。」と行きたくて行きたくて声を出して泣いていただど。そしたら飼っていた猫が「嫁こよ、嫁こよ。そんなに行きでのか。そんなに唄や踊りが見てのか。」といったとき。すると「オラも皆んなと同じように見て。」といっただど。「そんなじゃ俺が寺よりも上手に唄や踊りをやって見せっぺは。」といって、次から次へと唄や踊りをやってみせたなど。

嫁は涙をながしながら「猫様ありがとう。本当にありがてな。」といって手をたたいて喜んだなど。その時猫は「これこれ嫁こよ。このことは絶対よその人にしゃべんぞねえぞ。」と何回も何回も念を押しただど。

嫁は、はじめは猫のいうことを守っていただど。んじゃげんども、しゃべきやくてしゃべきやくていても立ってもいられなくなつただとき。10日位もぞもぞしてもしゃべんなかつたけど、どうしても我慢できなくなつて、村の人に「オラ寺さ行がねけど、猫にそれ以上の唄や踊りを見せてもらった。」とたいそう自慢しただど。

そしたら「俺があれほど言うなとゆつたのに。お前はペラペラとしゃべつたべは。」と猫は怒つて嫁の咽に食らいつき、食いちぎってしまっただど。それが元で嫁は死んでしまい、働き手を失つたその家も運がぐだり調子になり、そのうち潰れてしまつただとき。

5. 人々の暮らしに息づく観音・地蔵信仰

江戸時代には5集落に観音堂、5集落に地蔵堂があり、地蔵堂には観音様が一緒に祀ってある。また、3ヶ所に占いの石や仏様(おびんずる様など)が安置されている。ご詠歌のある集落は9つあり、ご詠歌はなくても、各集落で観音講が行われており、信仰の深さがうかがえる。会津の観音信仰は新郷にも浸透しており、男性は伊勢参りに行けたが、女性は行けなかったので、観音講で集まり、会津三十三観音の歌詠みで心の旅をし、サロンの場としてお茶飲みや愚痴こぼしなどで娯楽を楽しんでいた。

一方では飢饉や年貢の取り立てなど厳しい生活を強いられ、子供が産まれても半分しか育たなかった状況もあったようである。そんな暮らしのなか、近くに医者がいなかった時代、お産が軽くなるようにと近所のおばあさんが石で占ったり、病気が早くよくなるよう仏様を持ち上げたり、よくしたい部位をなでて願を掛けたり、年貢が軽くなるよう観音様にお祈りをした。また、子供の夜泣きが治るようにと地蔵様の前掛けを借り、治ったあかつきには借りたものともう1枚新しく作ったものを奉納した。観音様や地蔵様は、老若男女にとって心の拠りどころであり、拝見すると先人たちの生きた証しがひしひしと伝わってくる。

本町でも縄文時代の土偶が出土しているが、土偶は安産・食料確保・病氣治癒など人々の願いを掛ける道具、心の安定を祈る道具とも考えられているようである。この土偶がさまざまな時代に形を変え、観音様や地蔵様への祈りとして受け継がれてきたのだろう。



樟山の地蔵堂

